

---

# カリーナエの鳥籠

夜川真夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カリーナ工の鳥籠

### 【Zコード】

Z0939V

### 【作者名】

夜川真夕

### 【あらすじ】

魔法使いの弟子コレーナは夜の森で少年キラルティ工を拾った。訊けば人攫いにあい逃げてきたという。彼の故郷は遠く、どうにか家族に無事を伝えようとしているところで、今度はコレーナが攫われた。魔法使いの目の前で、「ぬか床があー！」との叫びを残し。少女と魔法使いと人と異種族が出てくる、シリアルスともギャグとも言えないファンタジー（たぶん）。ライトノベルやジュブナイルな感じで残酷表現が出てきます。「ご注意ください。性描写は直接的な表現ではありませんが、会話として出てくるかと思います。十万字

前後になる予定。嘘。すみません。十万字は軽く越えます。

話が進むにつれて血まみれ肉まみれ（肉片で意味で）描写があります。ご注意ください。

面倒くさいので一話ごとに警告は出しません。

性描写は直接的な表現をしないよう心がけますが、こちらもやっぱ  
リライトノベルやジユブナイルくらいには出てくるかと思います。  
がつづりエロは書きたくなつたらムーンライトに書きます。書くか  
な、どうだら。

#### 登場人物紹介

ハイラム・クレーバーン	<<	魔法使い
ユーレーナ・ディーリッハ	<<	魔法使いの弟子
アゼルドアー・ファガ	<<	仕事相手
オズグッド・ワーレイ	<<	空挺総軍第十一空挺師団第一飛行
群第六飛行隊所属		
キラルティエ・アーシェスネードルング	<<	シギリエの弟・
翼種		
シギリエ・アーシェスネードルング	<<	キラルティエの兄・
翼種		
ミラ・トエリス	<<	アーシェスネードルング家の昔なじみ

とととと、と足音が聞こえたわけではない。開け放たれたままの扉に向こうに気配を感じて、作業の途中で手を止めた。

「今日は黒猫か」

肩越しに振り返ったハイラムは、作業部屋に繋がる居間の床を踏む小さな獸の姿をみとめた。強ばつた体をぼぐすついでに右肘を背もたれにかけると、年季の入った木の椅子も耳障りな音を立てて軋む。

「一昨日はニモ、昨日はキジトラじゃなかつたか。猫続きだな」若い猫は逆三角形の顔を男に向けて立ち止まつた。瞳孔は昼の光に細まり、感情を読み取りづらい。

「返事のつもりか、みやあ、と鳴いた。」

「声帯の使いかた、上手くなつてきたな」首を傾けて筋を伸ばしながら、徹夜明けの男は、猫の丸まつた足先からしつぽの先までじろじろと検分する。髭の一本一本、全身の筋肉の動き、細かいところまで見落としがないよう醒めた目で観察し続けた。

「……今によ發音、猫つぽかつた？ 今しゃべつてる言葉はわかるかにや？」

猫はいたたまれなくて、身を縮めながら話しかける。

「語尾が、にや、になつてゐる以外は」

ようやく粗が見つかつた、とでも言いたげに、男は眉を寄せた。

「にや！？」

毛むくじやらの小さな顔ではわかりづらいが、猫は恥じらつているようだ。前脚で口元を洗うようにこすつた。

「ついでに言つとくが、全身しつぽの先まで汚れてるぞ」

男はからかうふうでもなく事實だけを述べる。それから自分の要求を簡潔に伝えた。

「メシ」

「はあい。でも、先に体洗つてきてもいい？」

「そりや、先でいい」

喉の奥で転がるような聲音で答えた猫は、歩調を変えずにそのまま部屋の奥へと消えた。

壁の向こうからにやにゅによに特徴のある小さな声と耳鳴りに似た甲高い音、それに続いて水音が響いてきてから、ハイラムは立ちあがつた。天井から吊されている枯れた草の束や埃をかぶつたなんかの種子を避けつつ腕をまっすぐ上に伸ばし、そのままゆっくりと右へ左へ体を傾けた。同じ姿勢でいたせいで凝り固まつた腰骨や脊椎がバリバリと恐ろしい音を立てる。少しほは元の身長に戻つただろうか、と年寄りくさいことを考えながら、最後に首を大きく回した。机の上に視線をやる。

徹夜をしなくとも間に合つた注文の品は、不安定ながら美しい形をしたいくつもの小瓶に入れられて、作業場の窓から差し込む陽の光に薄い鶴色の影を落としていた。

納期まではあと数日あるが、できたのなら早めに持つていくか。そうして帰つてきたらがつづり寝る。寝倒す。その前にメシ。

集中力が切れてぼんやりしてきた頭で今日の予定を立て、ハイラムは免許証の在処を探した。普段出かける時に持ち歩くそれがないと、いくら顔見知りに渡すだけであつても、下手をすれば逮捕される。小さな街で、逮捕する側とも顔見知りだが、備えはあつて困ることはない。免許証は持ち歩くのが常識だ。

免許証はいつも通り、得体の知れないものがあちこち散らばっている机の上ではなく、前の壁に吊り下げられていた。ヘビーウェイト樹脂板には所属を示す紋章と、いくつかの資格に印が彫り込まれている。？魔法技術者・第一種医薬鍊成師？とりあえずはこれだけ証明できれば問題がない。ハイラムは一度目をつぶり、瞼みしめるよつに小さく頷いた。

「先生、なにか食べたいものある？」

「がつたりしたもの」

突然訊かれて、なにも考えずに咄嗟に答えてみると、不満そうなため息が返ってきた。

「徹夜明けなのに重たいもの食べて大丈夫?」

作業部屋の扉から顔を覗かせた少女は、どことなく先ほどの猫の面影を残している。小さな卵形の顔の中の大きな瞳がそう思わせるのかもしれない。襟足で揃えられた髪は濡れていて、乾けばゆるく巻いて手に負えなくなるのだが、今はまだ水分を吸つておとなしくしていた。黒くはない。赤みの強い金褐色だ。

変身 の魔法は、趣味や愛玩に特化するか諜報活動のために特化するか、長いこと専門家のみならず一般のあいだでも意見が分かれている、いまだ正答はない。また、出来映えについても大きく二つに分類される。本人の元の姿と変身後の姿が似ることは、ある人から見れば術によって己を見失わないだけ腕がいいという証拠であり、また別の人気が見れば想像力が欠ける変貌は修行が足りないという判断が下される。少女の師匠の考えはどちらか一方に傾いているものではないが、人の姿の時と猫の時では毛色がまるきり違うのはひとえに彼女の努力の成果だった。

「ここ最近日課にしている 変身 の鍛錬を終えて、二人分の食事の用意を始めたコレーナは、がつたりしたものがつたりしたもの、と脳内のレシピ集を漁りながら台所に向かう。

「……がつたりしたものってなんだろう?」

「わからん」

「なにそれ。具体的に料理名を挙げてくれたら楽なのに」

「腹減りすぎて、よくわからなくなつた」

「でも先生、食べたら寝るんでしょ? だったら軽いもののほうがいいよ」

「いや、メシ食つたら出かける。おまえも一緒に行くからな」

「え? どこへ?」

「依頼されたものができたから、さつさと届けてくる」

「あれを届けに？ 今から？」

「ああ」

「！」はん食べて身支度してからだと、街につくの夕方になりそだよ。先生、一度寝てから明日行つたほうがよくない？ あの梶包に時間がかかりそうだし、先生が寝てるあいだにわたしやつとくよ？」  
「よくない」

「なんで」

「納品しないと落ち着かない。泥棒に入られて、あれを盗まれたら、この数日の働きが無駄になる」

「こんな山奥に誰も来ないと思うけどなー。結界衝けつきゅうしようの見回りしても異常ないし、森も静かだよ」

心配性だね、とコレーナは朗らかに笑つた。

「眠いは眠いが、今日の夜までは起きてられる」

ハイラムは、わかりにくく己の睡眠時間を気に懸けるコレーナに、心配性はどっちだ、とは言わないで、ケースに入れられた免許証を首から提げる。薄いカードなのになぜか重く感じられて、伸ばしたばかりの背筋が再び縮む感じがした。

「メシはおれが作るから、おまえもさつさと着替えて用意しどけ」

「え、この格好ダメ？」

コレーナは自分の体に視線を落として、首をかしげた。

元の姿に変容し、体を洗つて毛皮についていた蜘蛛の巣などの汚れを落とした少女は、薄手の白い服を身につけていた。ゆつたりと裾が広がる半袖のチュニックに太めに編んだ革ベルトを締め、墨色の細身のズボンを合わせている。色合いは地味だがコレーナと同じ年頃の少年がよく着る服だ。この家がある山奥から麓の街に下りる時は、これにふくらはぎ丈のブーツを履く。確かに若い娘はあまり着ることはないが、普段着として広く普及しているこの服に問題があるようには思えない。コレーナはどこか汚れやほつれがあるので、半袖だから？」

「それもある」「

「他にはなにが？ 半袖がダメなら、これになにか羽織ればいいしよ？ それを言つたら先生のまつがひどいよ」

「……そうか？」

「そうだよ。鏡見てみたらいいよ」

十以上も年下の弟子からの苦言に、ハイラムは眉根を寄せながら顎を撫でた。指先にざらりとした硬さを感じる。そういうば髪を剃つていなかつた。当然顔も洗つていない。寝て、起きたわけではないので、朝に行つ日課をすつ飛ばしていた。毛深いほうではないが、確かにこの姿は見苦しいだらう。整えやすく一定の量と長さで生えてくれるならまだしも、この年になつても長さも場所もまばらに生える髪はどうも格好がつかない。

「先生は無精髪が似合うタイプの顔じゃないんだから」

共に暮らしへ始めて数年が経つ弟子の遠慮のない言葉に、そつが、とハイラムはあつさり納得した。

黙つて首にかけた免許証を外し居間のテーブルに置くと、台所の近くにある風呂場へ向かつ。コレーナとすれ違ござま、長めの髪を無造作に結ついていた紐をほどいて、その手に押しつけた。

「メシ食つたら出かけるからな」

「なにも今日じゃなくてもいいと思うけどなー」

コレーナはぼやきながら、あまりがつついしたものではない食事を作るために台所に引つこんだ。

01(後書き)

超見切り発車。

一人称間違えていたので訂正しました。

(2011/07/23)

火を使うと熱がこもる。焦げなによつてフライパンを揺すると油がはねた。

台所の小さな窓は開けているが、風の通りは良くなかった。こんな山奥でも夏の熱気は訪れて、ついでに森の木々や土が発する湿気がどころどころ霧を生み出している。

がつたりしたものという要望はこの際わきに置いておいて、胃に負担がかからなくて手軽に食べられる食事を用意していくうちに、濡れた髪は乾いてしまった。空氣を含んで大きく波打つ。改めて出かける格好をするときこそ、髪をまとめるのが一番手間かかるかもしれない。

じばらぐのあいだ壁を這う水道管を通る水の音と、周囲に跳ねる大粒の雨の音がして、静かになつた後に扉が開いた。衣擦れは生活音にまぎれて聞こえない。ジャワジャワジャワ、キイキイキイと、なにが鳴いているのか、いくつもの生き物の声が混ざり合ひ、森の中にただ一軒佇むこの家屋に響いてくる。

「……余計に暑くなつて疲れた」

扉が開く音と一緒に声が聞こえた。

汗や汚れを洗い流してすつきりしてきたはずのハイラムが、頭から被つたタオルで黒い髪を乱暴に拭きながらじけむ。目の充血は治る気配はないが、髪を剃り、身なりを整えると、身長があるせいです線の細い印象を受ける若い魔法使いがそこにいた。上は袖なしの前身頃を紐で結ぶタイプのアンダーシャツで、下は薄っぺらい生成のズボンを履いている。

コレーナは、見た目に似合わず隙だらけのこの男の生活様式に、ここ数年のあいだで慣れた。

そのうちパンツ一丁で風呂からあがつてみると、春期の女の子らしく汚らわしいものを見るよつたつつきで師匠を睨

もうと思つてゐるが、まだまだ先は長そつだ。その点については、ちょっと安心してゐる。うつかり、お父さんといふかおっさんぽい、と言つてでもしたら絶対に怒られる。

コレーナの胸の裡など知るよしもない魔法使いの彼は、行儀悪くも食卓にのぼる野菜の漬け物をひょいとつまんで口に放りこんだ。塩と鷹の爪で漬けられた青い瓜が、味蕾や喉、内臓を刺激しながら飲みこまれた。不足した栄養分を補つてくれるような気がして、二、三個立て続けに味わう。

「じゃあ今日出かけるの、やめようよ」

コレーナは米を握る手を休めずに、考え直してくれないものかと渋り続けた。道中のお弁当にとおむすびを作つてゐるが、不要になればいい、と思っている。保存しておいて晩ご飯にしたらい。

「いや、今日行く

ハイラムは頑なだつた。

「寝不足で車の運転されると恐いんだけど」

「車は使わない。ナザで行く

「えつ、品物は割れ物なのに」

「梱包したうえで 停止 か 不可侵 でもかけとけば平氣だらつ」

「なんでそういうところ大雑把なの、先生」

ナザに乗つて街まで行くと疲れるんだよー、と弟子は師匠に文句ばかり言つ。

「ナザのまづが早く行ける

「そうだけど」

「おれは鞍つけてくる。おまえも早く着替えろよ。準備ができたらすぐに出るぞ」

そう言つながら魔法使いはコレーナの手の中の握り飯をちらりと見た。外出着に着替えるために自室へ入り、長袖に腕を通しながらすぐになって、裏口玄関に置いてある革の長靴を履くとそのまま厩舎へ歩いていった。

道中、移動しながら食べるつもりでいるのだらう。その可能性も

あるかなと考えていたので麺類などはやめておいたのだが、コレーナはそうなるだらうなと思っていた方向に物事が進んでいくのに、元別に喜びはしなかった。先ほどまでは「はんを食べてから出かけるつもりだった師匠が、この握り飯を見たせいで今すぐ出立すると思いついたのではないか。どちらも想像がつく。なんか失敗したかなあとも思う。

コレーナは手早く準備を済ませると、戸締まりの確認もしてナザの手綱を取りに行つた。

重なる枝の隙間から覗く太陽は傾きつつある。木々の葉が無数の影を作つても、上昇する気温と太陽光はじりじりと肌を灼いた。山でこうなら下界はもつと暑い。

街までの距離とナザの平均速度を計算すると、小一時間で到着するはずだ。

?ナザ?は傾斜のきつい山間部で飼育されることが多い大型の草食動物で、前側が二つに割れた蹄とその後ろに分岐した小さな突起を持ち、額に湾曲した角が一本生えている。飛ぶように岩場や山道を駆け、一説にはその鋭く長い角で下生えや張り出した枝を薙いでは先を進むとも言われているが、コレーナはそこまで早く走らせたことがない。小一時間、鞍上で震動と速度と風圧とに耐えられるかが心配だった。

風よけのために長袖を羽織り、革の手袋も忘れなかつた。髪を整える時間はなかつたが、どうせこれから風に煽られるのだ。街のそばに行つたらどうにかしたい。根性のあるくせ毛がどうにかなるならば。

外套のフードを田深に被り、その上から顔の半分を隠す大きさのゴーグルをする。口元を呼吸の確保のために付属の布で覆うと、服装と成長過程の細身の体とが相まって性別不詳のなりとなつた。

「先生、ナザの上で寝ないでよね。落ちるよ」

「おれをなんだと思ってるんだ、おまえは」

「寝不足」

「……急ぐぞ」

もうナザに跨つていたハイラムは短い笞えに渋面を作り、ゴーグル越しに土がむき出しの路面の遠くをまっすぐ見つめた。膝丈の青いチュニックに細身のボトム、その上から長袖の外套を羽織り、首元に筒状のスヌードを巻きつけている。

スヌードを鼻まで押しあげてから低く号令を出してナザの手綱を操る。コーレーナもナザを続かせた。

茶色の胴体にくぐりつけられた木箱が大きく揺れるたびに、鳴りもしない、がしゃん、という音が聞こえてきそうで横に並ぶユーナはびっくりとしたが、魔法をかけた当の本人が平然としているため、努めて気にしないようにした。

横から無言で手を伸ばしてきたので、帆布鞄に詰めてきたおむすびを取り出して一つ渡す。水筒に入ってきた茶も差し出すと、もう片方の手で受け取った。手綱から両手を離しても、よく訓練されたナザ達は一定の速度で歩いていた。

鞍の上で揺られながら腹を満たすと、常歩なみあしから速歩はや歩、駆歩かけ歩を経て、二頭のナザの体が温まったのを見計らい、襲歩しゆ歩で走らせることにした。雄と雌のナザは嬉々として駆けだし、じゃれ合つように追い越し追い越されを繰り返しているうちに背に人を乗せていることを忘れた。

コーレーナは悲鳴を上げることもできずに歯を食いしばる。腹の中のものがかき混ぜられる感覚が不快だった。前を行くハイラムは背を丸め、鎧あぶみを固く踏んで中腰になり、ナザの歩様に合わせていた。背が上下しない。無駄な力を入れず、師匠と同じように姿勢を保ちたいのだが、振り落とされないようにするだけで精一杯だった。とにかく必死にしがみつく。

だから急ぐときにはナザに乗るのはやだな。そんな愚痴を思い起すこともできない。

ナザは停止や速度落とせの命令がないのをいいことに、ひたすら前へ前へと進んだ。体高にあまり差がないナザは心持ち雌のほうが

速く、雄は雌の尻を追いかけ続けることとなつた。コレーナが騎乗するナザの雄は、雌を追いかけるのが楽しくて仕方がないといった様子だったので、この配置は長らく続いた。

ハイラムは時折、目の端で後ろを確認しながらも、速度を落とすことにはしなかつた。

ゴーグルの奥の瞳がどのような感情を持つているのか、コレーナにはよくわからない。未熟な弟子を心配しているようにも、出来の悪い弟子に落胆しているようにも、幾通りにも考えられた。できることがあるなら限界までやらせて、容易に手を出さない師匠の方針は、出会った頃から変わらない。コレーナはそう思い知られるたびに身が絞られる気がする。「己を律するための内省にはいつだつてかすかな恐怖がともなわれていて、ひどくなると足元が崩壊して己を引きずりこむ虚無感にまで発展した。不安を飲みこむのが、なかなか骨だ。

甘えてみせれば、氷水に沈んでいくのに似た落ち着かなさまでも統制してみせる、と魔法使いは言い切る気がする。だが、訊ねたことはない。訊いて、返ってくる答えが恐い。

あの日、無愛想な魔法使いに拾われたことで運命が変わった。とても感謝している。

とはいって、今も、ナザから落ちても拾いに来てくれるだろうか。

石切場となつてゐる山の側面をナザの脚力にまかせてほほ直降で下りきつて、ようやく小休止でもしようつかと声をかけられた。

生きてるか、と問われて、

「……なんとか」

か細く応えた。風よけの布に効果があつたのか疑問を持つほどコレーナの声は嗄れてしまつてゐる。暑さや石切場一帯に漂う破碎された礫から出た粉塵のせいだけではない。緊張で口腔が乾ききつていた。

ナザはもともとこの地に棲息していた岩場や山を縄張りにする獣で、長い時間をかけて家畜化されたのだと根気よく説明されたうえに、実際岩場を駆け下りる練習を幾度もしてきてはいるが、頭から真っ逆さまに落ちる感覚にはいつまでたつても慣れることができない。

曲がりくねつた山道を走る自動車とは比べものにならないほど速度で駆け下りたせいで、コレーナは額にびつしりと汗をかき、手綱を握つたままの両手は小刻みに震えている。指を動かすことができないため、休憩らしい休憩も取れない。

師匠は短く嘆息してナザから降りると、大きく肩で呼吸をする弟子のそばに寄り、白く硬直する指の一本一本をはずしていった。

「……ここから車にするか」

「……最初から車にしてよ……」

コレーナはさうにぐつたりと疲労に身を沈ませながら恨み言を呟く。

手綱から手は離れたものの、足腰が萎えて体がうまく動かない。男はまた一つ息をついて両手を差しのべた。幼い子供に向かつてするような態度に、来年には成人を迎える年頃の娘は赤面した。この年で抱つこはちょっと、と口にするのも憚られる恥ずかしさだ。数

年前はともかく最近は抱っこなんてされることがない。そもそも普通に生活しているなら互いの体に触れる必要がない。不肖の弟子と呆れられているのもこたえるが、いつまでたっても庇護すべき子供だと思われているのもなんとなく癪だった。

男の手を取るのに躊躇して時間を稼いでも全身の震えは一向に治まってくれず、コレーナは心ならずも情けに頼る。

「……先生、どうしてそんなに急いでるの……」

石切場を迂回する坂路なら家を出るとこりから自動車を使えた。時間がかかるつても乗り心地と弟子の心身の安寧を考慮して自動車を出してほしかった。

「街に着くのが遅くなるだらう」

だから明日出かけようつて言ったのに、との意見も聞き流された。立つていられないでしゃがむコレーナを脇目に、ハイラムは車を出すために石切場そばの小屋へ向かう。

「……先生、言葉が足りない」

気落ちしたままこの数年思い続けていたことを口に出してみれば、魔法使いは不意を突かれた様子で振り返り、「ゴーグルの下の目を丸くした。端正な顔が畠然としてゆるむ。

「今さらそれか」

一拍置いて小屋へと向き直り、埃よけのゴーグルをはずして軽く目を伏せた。

「……わたし何度か言つたような気がするけど」

「そうだったか」

「……よく覚えてないけど」

「おれも覚えていない」

少女のハツ当たりも気にせず、身を屈めてあちひらひら自動車の状態を確認してから、男はナザの背から荷物を積み替えることに専念した。

精密な手綱さばきと極度の緊張を強いられた肉体は、疲労の頂点

に達して強制的に停止、感覚の遮断をしようとする。助手席でぼんやりするコレーナに、ハイラムはなにも言わなかつた。沈黙も駆動音にまぎれる。冷石を発動させるとものの一分もたたないうちに汗が引く温度に下がり、車窓からの日差しも気にならない程度には車内は快適だつた。離したナザは勝手に山で遊んだあと、小屋に帰るだろつ。

蛇行する山道を進むうちにぽつぽつと民家が現れ、そのうち集落が寄り合わさつて街らしき様相となつてきた。土がむき出しの道が舗装された境目付近にある古い家の前で老人が畠仕事に精を出しているのを車窓から眺め、サウルのおじいさん今日も生きてるな、と失礼ながら一人して同じことを思う。

一人が暮らす穎区えいくを抜けだんだんと混雜して車線も多くなる道路を一時間半ほど走らせ、南区なんくの目的地に到着する。商業施設の建ち並ぶ一角、狭い間口のガラス扉から見える店内のカウンターに男がもたれ掛かっているのが見えた。

「アゼさん？」

店の扉上部に備えつけられたベルが鈍く響くのと同時に、コレーナが驚いて声をかけた。

「よお、コレーナ。久しぶりだな。ハイラムも」

鷹揚に振り向いた男は片手を擧げる。

「依頼人つて、アゼさんだつたの？」

「いや、俺じゃない。俺はたまたまこっちに用事があつてこの街に寄つただけだ。それで昨日、つづーか今朝方か。ハイラムに連絡してな。暇ならメシでもどうかと思つてよ」

アゼルドナーは急そうに身を起こすと、少女の背後に佇む魔法使いを見やつた。よく似合つ無精髭で覆われた顎を撫でながらにやりと笑う。

「顔色悪いな、魔法使い。優男が台無しだぞ」

「納品に来たんだ。おまえも来るなら当口じやなくて早めに言え。

そして仕事持つてこい」

「俺が仲介する仕事を受けるなら、もつと寝る時間なくなるぞ」「短期で仕上げてそのぶんふんだくるから問題ない」

「おいおい、値引きの交渉もなしかよ」「アゼルドアーは肩をすくめた。商売人というかなんでも屋として

各地を往来する男は、地域や階級を問わず顧客が多い。金離れがいといいう意味での上客が金に飽かしてしてくる無理な要望に応えられるハイラムとは持ちつ持たれつの関係だ。

男一人のやりとりを横目に、ユレーナはこの雑貨屋の看板娘と世間話をしていた。店の上階が住居となっていて、店番の娘の母親である店主が降りてくるのを待っている。

「ハイラムつて、見た目はいいのに愛想がないわね、相変わらず」ユレーナよりも先に成人した娘は、そっと声を潜めて値踏みするかのように同世代の男二人を見比べた。がつしりした体格で圧迫感のある男くさながら気さくなアゼルドアーと、その横に立つとますます細く肉体労働に向いていないように見える無愛想なハイラムは、彼女にとつてどちらももう一步というところらしい。あの綺麗な顔で笑ってくれたり話やすかつたら最高なのに、といつも通りにバツサリ切り捨てた。

「先生、完徹なんだって。締切まではまだ日にちあつたでしょ？  
なのになんか頑張っちゃつて」

「まあ、それは助かるわ。実は依頼した数だと予約分でおしまいなの。また同じ数量を引き受けてくれるかしら」

「うーん、それは先生と話してね」「

カウンターに背を向けて俯きがちにぼそぼそしゃべっている男達の様子を窺いながらユレーナは答えた。タイミングを見計らい、会話が途切れたあたりで師匠に短く問い合わせる。

「先生、わたし少し出てきてもいい？」

魔法使いだけでなく、商人もハツとして少女のほうへと振り返った。

「ああ、いいぞ。おれはここにいる」

「夕飯一緒にどううな、コレーナ」

「うん。じゃあ、ちょっと行つてくるね」

につこりと笑顔でひらひら手を振つて、コレーナは店を後にする。ガラス扉越しに目的の施設へ向かつて駆け出す姿が見えて、すぐに建物の角に消えた。

誰もなにも言わずに後ろ姿を見送る。

「……なにか手がかりでも入つていればいいけど」

店番の娘が切なげに呴いた言葉がやけに重たく店内に響いた。

### 03 (後書き)

また一人称間違えていました。  
すみません。 (2011/08/04)

施設内の人目につかない場所に設置してある端末機を借りる。事前登録した個人名とパスワードを入力、掌形と血管と虹彩の生体認証を行うために専用の紋章が刻印されたプレートを各部位にかざして、いくつかの設問にチェックを入れてから、得たい情報のキーワードを検索していく。流れる文字は膨大でもほしいものはなにも見つからない。期待していたわけではないので落胆も小さかつた。これ以上傷つかないように。四年五年同じことを繰り返しているうちに、脆い心が大波に翻弄されて上下左右に揺れ動くのが辛くなってきて、あまり期待しないよう無意識に歯止めをかけてきた。それでも、いつも、なにかあれば、と願ってしまう。

そして今日も気分が沈むだけで終わつた。担当係官の励ますような眼差しも失意に上乗せされる。

早々に戻つてくると、魔法使いと商人は難しい話をしていたらしい。先ほどと変わらない姿勢で腕を組み、険しい表情で額を付き合わせていた。ユレーナが二人の邪魔にならないようカウンターに寄ると、納品手続きは完了していて、木箱から取り出された小瓶が並べられていた。一つの破損もない。ナザの乗り心地を思い出しながら胸を撫で下ろし、気の重さを払拭するために口角を上げると、カウンターの向こう側にいる店主が、困ったものね、とでも言いたげに微笑んだ。

「夕飯はマドラーの店でいいか？ あそこなら子供も食べられるものがあるだろう」「

話が一段落したところで、商人が眉尻を下げて人なつこい笑顔で振り返る。

背伸びしたい年頃の娘には気になる言葉だったが、ユレーナはそう茶化してくれたほうが有り難かった。「もう終わりか。早かつたな」などと言われなかつたことにも安心する。短時間で用事が済

むといふことはめぼしい収穫がないことを意味しているからだ。

「アゼさんと先生が恐い顔してたのって、どっちがおごるか揉めていたから?」

くすっと笑つたコレーナがいたずらっぽく返すと、男一人は虚を突かれてむつとし、一瞬沈黙した。互いに顔を見あわせ、同時に握りしめた拳を突き出したかと思うと、

「……じゃんけんしょ」

勝負に出た。

果たして、アゼルドアーが肩を落として財布の重みを確認しているあいだに魔法使いとその弟子がマドラの店に向かうと、肝心の料理店は臨時休業だった。斜向かいの弁当屋の店主が言つたのは、一人娘の具合が悪いという。

「マドラもギャビンも一緒に出かけてるとは珍しい」

「心配でおちおち店も開けてられんのだろつ。ましてや初孫だ。同じ国内に住んでるらしいが、この街から旅客機で三時間以上かかるなら、なにかあつたときにつぐに駆けつけられないもんな」

「ここからセニヤ市？　まで？　って言ってたっけ？　シーラさんが住んでいるのって。国の端から端だもんね。シーラさんもおなかの赤ちゃんも無事だといいけど……」

マドラとギャビン夫婦とその娘のシーラは、コレーナの恩人だ。四、五年前は今に輪をかけて無愛想だったハイラムが気まぐれに十歳の女の子を拾つたものの、扱いを決めかねて一時期この家族の助力を求めたことがきっかけで、それ以来コレーナのことを末の娘のように可愛がつてくれている。

マイヤ一家は？　オーメイト？　で、コレーナと同じ種族だ。？　オーメイト？　は単純に？　オー？　または？　ヌル？　または？　デズ？　と呼ばれている。？　鱗種？　？　翼種？　などとは成長速度が異なるため、ハイラムとしてはできることならオーメイトの一般家庭で生活の基本を学ばせたかった。特に、これから第一次性徴を迎える少女の生態を。当然知識としては知つてはいるが、心構えなど細かい部分は同性に教

わったほうがいいだろうとの判断だった。とはいえた魔使いの交友関係が独特で多彩だったのか、当時はここタルバルダル市のみならずこの国全体的にオーメイトの割合が高いことを知らなかつた。生活全般に興味がなかつたせいもある。

マイヤ一家のおかげで、コレーナは稼ぐこと以外は一人で暮らしていけるだけの生活能力を身につけた。山奥の家で一緒に暮らし始めて数年が経ち、ハイラムは働き者が同じ家にいる樂さに慣れすぎてどうしたものかと密かに困つてゐるのだが、口には出さない。

「マドラさんに味をみてもらおうと思つて、ぬか漬け持つてきただけどね」

「おまえ、おれには割れるんじゃないかと文句言つたくせに  
「さすがに瓶詰めじゃないよ、ジッパー付き汎用樹脂バッグに入れてきたから」

「俺食べたい。ここで切つてもらおうぜ」

アゼルドアーはやはり知り合いであるここの中の店主を呼んで、コレーナのぬか漬けを切り分けてくれるよう頼んだ。店長は料理を卓に並べつつ愛想良く引き受けてくれる。持ち込みはお断りさせていただいています、との言葉がないかわりに、私どももご馳走になつてもいいですか？ と訊かれて、コレーナは恐縮して顔を真っ赤に染めた。恨めしそうにアゼルドナーを睨む。商人は大きな口を横に広げて一カツと笑つた。

マドラの店名物の、というよりギャビンの作る特製たれ付き鶏の半身揚げが食べられないのは残念だが、この店はこの店でオススメ料理が美味しい。キャセロールの中でぐつぐつ煮立つタコや、とろみのあるソースがかけられた生野菜と縮れた麺、香辛料をきかせてパリパリに揚げられた手羽など、次々に運ばれてくる。

コレーナが商人の財布を気にしているのか、本当に食べたいのか、品目の中から安いのばかり注文しているのを見とがめて、商人は太つ腹なことに大きな刺身の舟盛りを頼んだ。俺は骨と皮ばかりのメリハリのない体が好きじゃないんだ、と聞いてもいらない好みのこと

をしゃべっているものの、コレーナが魚を好むことを知つていての振る舞いだ。まるで自分が食事をさせていないようではないか、とはハイラムも言わなかつたが、眉を鋭くしかめながら滋養のありそうなものを選んでいくつか注文する。コレーナはダイエットなど気にするふうでもなく、次から次へと手をつけていった。

コレーナがその華奢な体のどこにそれだけの量が入るのだというくらいに食事に専念しているあいだ、男一人は適度につまみながら互いの情報を寄せ合つ。商売については互いに利益を探りつつの会話となつた。他には、久々にタルバルダル市に寄つたアゼルドナーから首都や主要都市の様子、アゼルドナー自身や各地に暮らす知人の近況を聞き、こちらの暮らしも少なからず伝え、ハイラムとアゼルドナーでコレーナの将来の方向性について討議したが十五歳になるのに公的な学校に通つていないのは問題じやないかということが主で、アゼルドナーはなんなら自分が拠点にしている大都会ブリントに連れていつてやるぞと言い、ハイラムは己が取得している？魔法技術者養成担当官？に弟子入りした者は公的に認められた学校を出たと同じ扱いになると黙つて引かなかつた。話題の中心の本人にも「どうしたい？」と訊ねたが、当のコレーナは曖昧に微笑んで困つたように首をひねるだけだつた。

よく食べて、よく飲んで　この地ではアルコール度数が低い酒ならば一杯まで飲んでも飲酒運転にはならないが、寝不足のハイラムは念のため酒を一口も飲まなかつた　よく語り、刻は瞬く間に過ぎてゆく。夕刻の早い時間から始まつた食事も、あと一時間ほどで日付が変わるという時刻でおひらきとなつた。

「長く引き止めて悪かつたな。俺は明後日まではこの街にいるからよ

「……だったら、今日会おうと言わなくてもよかつたよな？　ええ  
？　詫びに今度こそうまい話を持つてこい」

「メシおごつたじゃんかよー」

「たかがそれだけでおれの睡眠時間を買収できると思つたのか」

「すみません、アゼルド。たくさん」駆走になつちやつて……」  
申し訳なさそうにコレーナは頭を下げる。

「なに。そこは、ありがとう、だろ?」

言い足りなさそうなハイラムを無視したアゼルドアーは、まだ二十代なのにもう刻みこまれつつある田尻の笑い皺を深くして、「につこり笑つてありがとうつて言つときや、男は美人の言いなりになるんだからよ」

コレーナの金褐色のくせ毛をわしゃわしゃと搔き混ぜた。

子供扱いなのか年頃の娘にふさわしい扱いなのか測りかねるが、コレーナは頭を抱えるように指を立てて髪を整えながら、

「ありがとう。」駆走様でした」と、はにかんだ。

笑い返したアゼルドアーが視線をコレーナの後方に向けると、魔法使いが不請顔で一人を見ていた。アゼルドナーは意地悪そうに口の端を上げてにやにやする。それでますます魔法使いは剣呑な顔つきとなつた。それもまたアゼルドナーを爆笑させる。

「おまえ、それは、ダメだ、腹痛え！」

ひーひー涙を流しながら笑い転げるアゼルドナーを見、冷氣を纏つているような師匠を見て、コレーナはなにがなんだかわからず不思議そうに首をかしげた。

04 (後書き)

じゅんけんしょ = じゅんけんぽい、じゅんけんぽい等

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0939v/>

---

カリーナエの鳥籠

2011年9月20日03時20分発行